

札幌の植物を見直そう

原 松 次

札幌は農学校以来の長い歴史を通じ諸先輩が北海道植物研究の拠点としてきたばかりに、地元のフロラなど今更の感が、いつしか社会通念となり盲点のまま今日に至っているのではあるまいか。これは札幌へ転入したこの4月から市内各地を歩き回った私の実感である。本会準備世話人会（4月27日）の折、設立の趣旨の中で「札幌の植物」さえいまだ出ていない」とつぶやかれた伊藤会長は、つとにこの点を痛感しておられたのでしょう。ここでは中央区の円山と北区を一例として目についた興味あるいくつかを紹介することとした。

春の円山——ユリワサビ（あぶらな科）、ヒメニラ（ゆり科）、イヌノフグリ（ごまのはぐさ科）。北側にまだら状残雪がある4月21日、東斜面の裾ではヨブスマソウ、オオハナウド、ニリンソウ、エゾトリカブト、オオウバユリなど夫々のスタイルで苗を立て、エゾエンゴサク、キバナノアマナそしてエンレイソウはすでにほころびかけていた。春の息吹を満喫しながら少し上るとこれらの姿は消え、その上の方のガラガラした石ころが露出した所に2~3の小さな緑色斑が目についた。近よったらそれはユリワサビで、すでにつぼみを用意していた。これで本種の分布が胆振地方よりさらに北上していることを知った。ヒメニラに出合ったのはこの数日後、南東に面した平地との境目を歩いているときであった。ほぼ50cm四方にかたまりごっそり生え、細長い2枚の葉の間から柄を伸ばしその先に小さな白っぽい花をつけていた。他地方同様ここでもすべて雌花であった。本種は十勝や釧路地方にもあるという。

うれしかったのはイヌノフグリとの出会いである。専門書には北海道も分布域に入っているため、あのピンクのめんこい花を懐かしみ、道南へ出かけるときはいつも狙っていたものの空振りに終わっていた。自然の舞台はすでに夏へ移りつつあった6月11日、東側から林床へ一歩入ろうとしたとき、オオイヌノフグリにしてはおかしいぞと手にしたらなんとそれであった。もう花はなく、ふくれた多くの果実をつけていた。道内の他の仲間は3種、いずれも帰化品でオオイヌノフグリとタチイヌノフグリは各地に、そしてフラサバソウは伊達にあ

る。

夏の北区——コウモリカズラ（つづらふじ科）、ヒロハヒルガオ（ひるがお科）、ゴキヅル（うり科）。コウモリカズラは葉は左巻き、下方は木質化し越冬する雌雄別株のつる草で、10数年前十勝の本別で出会ったにすぎない稀な種類と思っていたのに、ここでは水田の畔や防風林などにあり珍しい存在ではない。円山や西区でも見ているので市内に広く分布するのであろう。北大植物園の東北隅に茂れフェンスにからみついているのも自生であろう。6月に咲くが道内では実れないのかついに果実は発見できなかった。炎天下の花が目につきやすいヒロハヒルガオは全道各地にあるもののいずれも点状的である。しかしここでは乾燥化が進んだ泥炭地に群がりオオヨモギ、セイタカアワダチソウなどに覆いかぶさるほどはびこっている。周知のようにヒルガオとコヒルガオは実りが悪いのに、本種は群生の場合には別として鈴なりの果実をつけている。白とピンクの株がふつうにあり後者の場合、長い三角状の葉を確認しない限りヒルガオと誤認しやすい。

同じつる草でもゴキヅルは巻ひげでからみつくとし、1年草で水湿地にある。はっきりしている自生地は道内では日高と胆振であり、後者の白老でみる限り個体数が少なく採すのに苦心する。ところがこの沼や流れの縁には群生しヨシやヤナギにはいり花は小さくほとんど目につかないのに果実はだ円形で約2cm長と大きく、ぶら下り秋に横真二つに割れ種子2個を水に散らす変りものである。

今後何が出てくるか楽しみである。

尾山志子

